

# 尾張における草創期の寒巖派

川 口 高 風

## 一 寒巖義尹と普濟寺十三門派

寒巖派の始祖寒巖義尹は建保五年（一二一七）、京都北山に生まれた。後鳥羽天皇あるいは順徳天皇の第三皇子といわれており、そのため法皇派とも称されている。幼時に延暦寺へ入り十六歳で出家して天台の教学を学んだ。仁治二年（一二四一）、二十五歳で山城の興聖寺にいた道元に参じ、寛元元年（一二四三）の越前永平寺への移住にも従ったという。

その後、二度入宋し無外義遠、退耕徳寧、虚堂智愚らを訪ねた。帰国後、博多の聖福寺に留まっていたが、文永六年（一二六九）頃、肥後の古保里の素妙尼の招きにより如

尾張における草創期の寒巖派（川口）

来寺を開いた。建治二年（一二七六）には母の皇后の菩提のため極楽寺を建立し、同年から弘安元年（一二七八）にかけて九州第一の難所といわれた緑川に大渡橋を架け、同六年（一二八三）には河尻庄地頭の河尻泰明の外護を受けて、大渡に大梁山大慈寺を創建した。同寺は、正応元年（一二八八）に後深草上皇の御祈願寺の勅許を得て曹洞宗最初の官寺となった。さらに、永仁二年（一二九四）には伏見天皇が義尹に紫衣被着を許しており、義尹の積極的な活動により寒巖派の基礎が成った。そして正安二年（一二三〇）には、如来寺で八十四歳にて示寂した。

義尹の弟子は五人いた。斯道紹由、鉄山土安、愚谷常賢、仁叟浄熙、釈運で、その中、鉄山、愚谷、仁叟の門下によつ

尾張における草創期の寒巖派（川口）

て肥後や東海地方に寒巖派を發展させた。特に鉄山士安―東州至遼―梅巖義東―華蔵義曇と続く華蔵は、本師の梅巖示寂後に諸方を遊歴し、遠江に入って引間城主吉良氏（吉良義真）の請により、正長元年（一四二八）には随縁山普濟寺（一説には随縁寺）を建立し、永享四年（一四三二）には、今川氏の協力を受けて寺地を現在地に移し広沢山普濟寺（静岡県浜松市広沢）と改めた。

華蔵には十六人の弟子がいたが、早世した三人を除き、十三人が各地に寒巖派の寺院を開いた。弟子の名と開山地をあげてみると

- 一、誓海義本 名古屋市熱田区神宮 円通寺
- 二、利山義聰 愛知県刈谷市天王町 楞嚴寺
- 三、透翁義能 静岡県浜松市三方原町 新豊院
- 四、天礪義倫 静岡県浜松市庄内町 龍泉寺
- 五、龍沢永源 愛知県岡崎市滝町 万松寺
- 六、鶏岳永金 山梨県都留市桂町 宝鏡寺
- 七、東海義易 愛知県豊川市豊川町 妙巖寺
- 八、天翁義一 静岡県磐田市城之崎 福王寺
- 九、南嶺義薰 愛知県渥美郡赤羽根町 法蔵寺

- 十、命天慶受 静岡県浜松市庄内町 宿廬寺
- 十一、傑堂義俊 静岡県浜松市下池川町 天林寺  
傑堂義俊 愛知県渥美郡渥美町 常光寺
- 十二、月窓義運 静岡県浜松市広沢 西来院
- 十三、在天弘雲 静岡県浜松市蔄塚 宗源院

となり、遠州、三河、尾張、甲州にわたっている。弟子の十三人が建立した十四カ寺と、その末寺を一括して普濟寺十三門派と称し、華蔵以後の普濟寺は十四カ寺住職の輪建制により運営された。室町期には今川氏の帰依を受け、東海地方の曹洞宗發展に大きな影響を及ぼしたのである。

二 尾張に進出した寒巖派の門流

尾張に進出した寒巖派寺院の門流をながめてみると、「系譜」のようになる。

この門流は『延享度寺院本末牒』を中心に、延享年度（一七四四―四七）以後に門流となった寺院もあげた。合計七十九カ寺があげられるが、その中には円通寺の塔頭であった陽谷軒、瑞用軒、それに法持寺の塔頭であった一雲院、三笑軒、東陽軒、太虚院、耕雲院、高岩院、無翁院の七カ

寺も含まれている。しかし、現在では六十カ寺のみしか所在しない。

門流の所在する寺院は、所在地と寺籍番号をあげた。名古屋市内は区のみ、名古屋市外は市をあげた。海部郡と西春日井郡に所在する寺院は町をあげた。廃寺した寺院は『延享度寺院本末牒』に記された所在地をあげておいた。

### 三 誓海義本と明谷義光

寒巖派が尾張に進出してきたのは、華蔵義曇の弟子誓海義本による。普濟寺に所蔵する「誓海和尚略譜」<sup>③</sup>によれば、華蔵が遠州へ来て普濟寺を開いたのは応永年間（一三九四—一四二七）の末、その後、永享年間（一四二九—一四四〇）の末に誓海義本が華蔵に面授嗣法した。嘉吉年間（一四四一—一四四四）に誓海は円通寺を開いたとある。しかし、「常安寺世譜」<sup>④</sup>によれば、応永十三年（一四〇六）九月二十二日に華蔵は海蔵寺（熊本市奥古閑町）にて梅巖義東の法を嗣ぎ、永享六年（一四三四）に普濟寺を創建した。そして同十一年（一四三九）、普濟寺において誓海は華蔵の法を嗣ぎ、嘉吉年間に円通寺を開いたとある。

尾張における草創期の寒巖派（川口）

華蔵—誓海の嗣法は永享年中の末であるが、「常安寺世譜」では同十一年と確定している。両資料とも円通寺開創は嘉吉年中と同じになっている。康正元年（一四五五）四月一日に華蔵が新豊寺において入寂した後、同年に誓海は普濟寺六世に就いた。しかし、七月二十八日から一年ごとの輪住制をとっており、応仁元年（一四六七）にも再住している。<sup>⑤</sup> 文明元年（一四六九）には後土御門天皇より大明禅師の号を賜わり、翌同二年（一四七〇）八月八日に示寂した。

誓海は、熱田神宮祝師田島仲宗が旧堂を廃して伽藍を再建し、その請に依じて円通寺を開いた。円通寺は弘法大師創建といわれ、同地に所在した真言宗寺院で、それを曹洞宗に改めたのである。<sup>⑥</sup> 一説には、知多半島が田島氏祖先の墳墓地で、その一部である加木屋に普濟寺を建立した後、熱田へ移し円通寺とした。廃寺した跡地は、後に普濟寺を建立したが、乾坤院下に加わり長源寺の末寺となった。<sup>⑦</sup>

誓海が円通寺を開いた嘉吉年中に、弟子の明谷義光は誓海の法を嗣ぎ円通寺二世となった。明谷は熱田神宮宮司千秋家の子であったが、「常安寺世譜」によれば義元ともいわ

尾張における草創期の寒巖派（川口）

〔系譜1〕

普濟寺——円通寺(熱田区・九二)——法持寺(熱田区・九二)

春養寺(熱田区・九八)

一雲院(熱田)

三笑軒(熱田)

月笑寺(熱田区・一〇二)

洗月院(熱田区・九七)

東陽軒(熱田)

太虚院(熱田)

耕雲院(熱田)

梅尊院(熱田区・一〇〇)

高岩院(熱田)

無翁院(熱田)

光明院(中川区・二七)

空雲寺(中川区・二二九)

大運寺(瑞穂区・二八)

大泉寺(古渡村)

洞仙寺(中区・三二)

禅養寺(中川区・二二六)

長明寺(海東郡西條村)

宝昌寺(大治町・三七四)

東昌寺(大治町・三七二)

東光寺(大治町・三七〇)

正法寺(甚目寺町・三六七)

延命寺(甚目寺町・三六八)

長禅寺(中川区・三五六)

龍源寺(大治町・三六九)

成福寺(北区・八二)

林泉寺(京都府船井郡・六六)

妙覚寺(熱田区・九五)

天年寺(中川区・一三二)

慧光院(天白区・一〇六)

地藏寺(瑞穂区・一〇八八)

庚申寺(一宮市・一一九二)

千光寺(中区・二二〇)

智光院(中区・二一九一)

円覚寺(中川区・一一一四)

藥師寺(名東区・一一〇八)

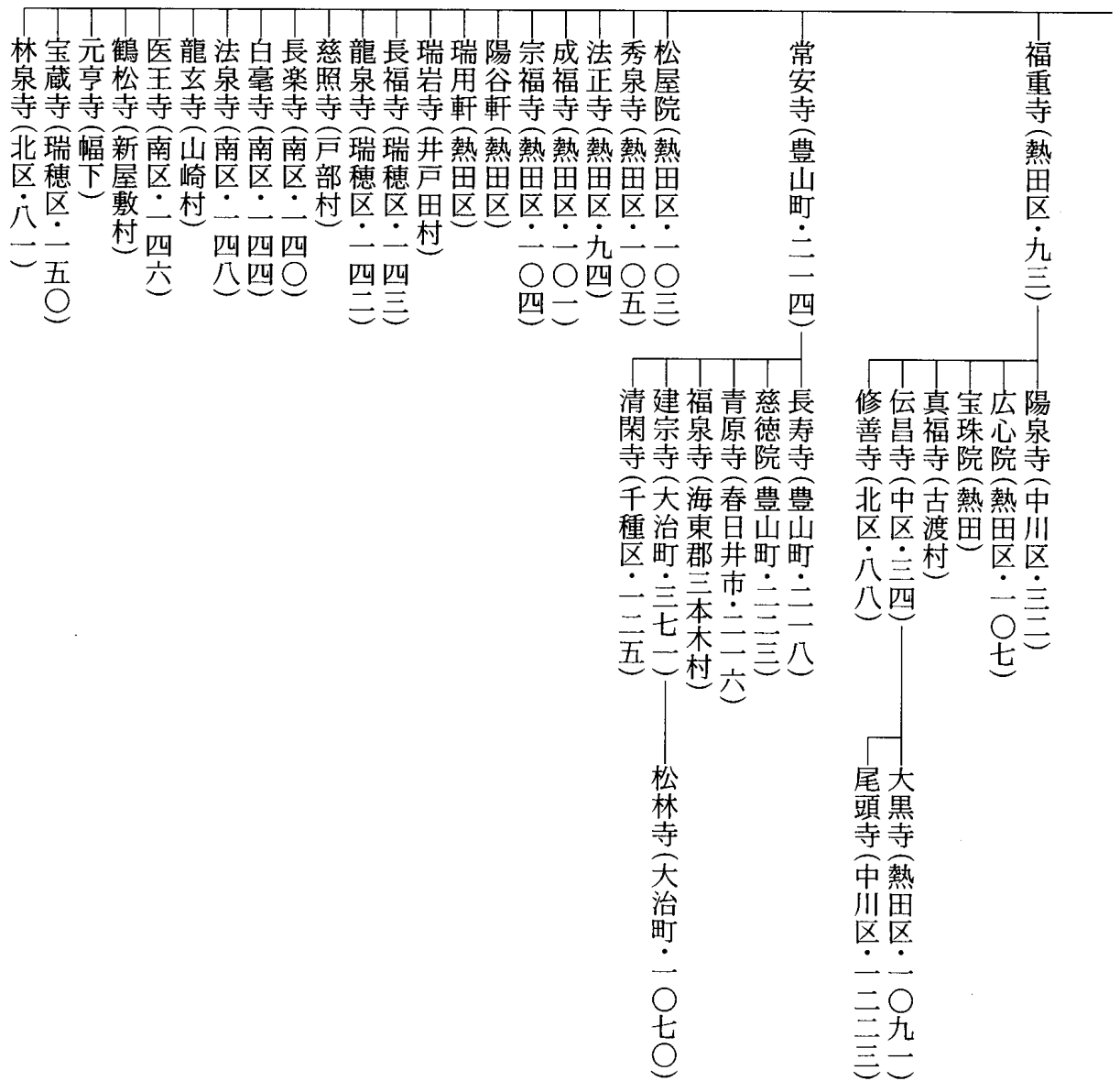
梅雲寺(瑞穂区・一〇三九)

無量寺(大治町・一一九七)

藥師寺(甚目寺町・一二〇〇)

常盤寺(中川区・三六四)

心榮寺(中川区・三六一)



尾張における草創期の寒巖派(川口)

れ、俗名が千秋尾張ノ宿祢義元であったためといわれている。また、「常安寺世譜」によれば、永享年間（一四二九—四一）に明谷が常安寺を開いたとあるが、嗣法以前に常安寺を開いたとは考え難く、常安寺開創年月日は明らかにならない。宝徳元年（一四四九）に法持寺が開かれ、続いて福重寺を開いたといわれているが、角田忠行の『熱田地陵墓考』によれば、応永年中（一三九四—一四二七）に福重寺が建立され、その後法持寺を建立したとする説が熱田神宮の社伝にもあるという。何れにしても明確に立証できるものはない。誓海が文明二年（一四七〇）八月八日に示寂しているため、文明年中（一四六九—一八六）に法持寺が真言宗より曹洞宗に再興されたとする説もあり、誓海示寂後に明谷は円通寺二世となり法持寺などを再興したか、それとも誓海示寂前に円通寺二世となり、法持寺などを開いたのか明確でない。

明谷は文明十三年（一四八二）に普濟寺へ輪住しており、その年の秋、頂相に自讃を記した。法持寺に伝承されたものには

山其白鳥 寺厥宝持

當頭穩坐 他是阿誰

徒畫龜毛幻質 應臻累子葉孫枝

皆文明十三稔秋吉辰 前住普濟本光自讃

とあり、福重寺に伝えられたものには

龜毛何似生 兎角没巴鼻

業識海茫茫 不停仏一字

文明十三稔之仲吉辰 円通明谷叟自贊

とあるが、両書とも戦災によって焼失したため両寺に所蔵しない。なお、法持寺旧藏頂相には義光でなく本光となっている。

明谷は翌同十四年（一四八二）十月十二日に示寂した。世寿などは不詳であるが、「常安寺世譜」によれば、その他に応永十一年（一四〇四）九月十二日、応永四年（一三九七）十二月十二日、大永四年（一五二四）十二月十二日の三説があるといわれている。しかし、何れも論を俟たない説として否定されている。

明谷が示寂して十二年後、円通寺は輪住制となった。これは「常安寺世譜」によるが、宝永六年（一七〇九）に円通寺九世興倫元苗が記した「円通寺記」には、明谷の示寂

後について

唱<sup>ヘテ</sup>滅<sup>ヲ</sup>之後<sup>チ</sup>住<sup>シ</sup>山<sup>ノ</sup>乏<sup>キ</sup>人<sup>ニ</sup>則<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>門<sup>ノ</sup>派<sup>ノ</sup>諸<sup>ノ</sup>師<sup>ノ</sup>相<sup>テ</sup>代<sup>テ</sup>輪<sup>テ</sup>住<sup>ス</sup>不<sup>シ</sup>敢<sup>テ</sup>專<sup>ラ</sup>主<sup>ニ</sup>席<sup>ニ</sup>仰<sup>グ</sup>本<sup>ニ</sup>光<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>師<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>德<sup>ヲ</sup>者<sup>ノ</sup>計<sup>ル</sup>百<sup>六</sup>十<sup>三</sup>載<sup>矣</sup>。

とあり、住持となる人物のいない時は、門派の輪住によって相続することをいっており、一六三年間輪住で運営された。

「誓海和尚略譜」によれば、円通寺は明応元年（一四九二）より輪住となったようで、明谷示寂後十年であった。

最初に明谷の上足であった常安寺二世悟峰宗得が就いたが、同年十月朔日に示寂した。その後の輪住は明らかにならぬが、法持寺二世維玄義中、福重寺二世徳中義雲らが就いたものと思われ、明谷が開いた常安寺、法持寺、福重寺の三カ寺の住持、またはその末寺より輪住が出て運営していたものと考えられる。しかし、残念ながら輪住に関する資料はまったくない。本寺の普濟寺と同じ運営方法をとったのである。

明谷の開山となっている寺院がその他にもある。長楽寺（名古屋市南区呼統）は文明六年（一四七四）、二世義山華嚴が寛蔵寺を再興して長楽寺と改め、明谷を中興の開山に

尾張における草創期の寒巖派（川口）

迎えた。その後、天文年間（一五三二―一五四）には戸部城主戸部新左衛門が再建したといわれる<sup>(1)</sup>。そのため「前永平當寺開山明谷義光大和尚」の位牌と「文明十四年壬寅十月十二日」とある開山塔を祀っている。秀泉寺（名古屋市熱田区一番）は『名古屋神社記録集』五十五（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）所収の「久喜山秀泉寺再建立記」に「文明十三年に隱遁の地として取得し庵を建立したのが始まりといわれている。

宗福寺（名古屋熱田区一番）は『名古屋寺院誌』によれば開山となっており、二世には独運聞瑞（文明十六年四月二日示寂）が就いている。黄龍寺（名古屋南区呼統）は同寺に所蔵する「歴代古記」によれば、明谷を勧請開山としており、『名古屋寺院誌』によれば慶長年間（一五九六―一六一四）に勧請したとある。

龍泉寺（名古屋市瑞穂区井戸田）は、同寺の日牌帳の「十二日」に

円通二世當寺開闢明谷義光大和尚<sup>文明十四壬寅十月</sup>

とあり、龍泉寺の開闢になっている。しかし、その年次などは不詳である。

なお、円通寺には誓海と明谷がそれぞれ自刻した檜材一本造の秋葉三尺坊二体が祀られており、<sup>(12)</sup>常安寺には明谷の伝衣（木蘭色、二十五条衣、四長一短、縦一一七センチ、横一六九センチ）を所蔵している。

#### 四 円通寺の輪住と世代の矛盾

普濟寺蔵の『當山前任牒』によれば、大永二年（一五二二）に円通寺四世南齡牛譽が普濟寺へ輪住している。天文五年（一五三六）には円通寺五世天海孤舟が輪住しており、同十六年（一五四七）にも天海が再住した。

この二人が円通寺独住世代であったならば、「円通寺記」「常安寺世譜」による円通寺輪住説と異なることになる。それとも四世、五世までは独住で、普濟寺へ輪住した後、輪住制となったのであろうか。『張州雜誌』巻第五十六の円通寺項によれば、「或記云」として孤舟のことが記されている。それをあげると

或記ニ云。円通寺の住僧孤舟和尚八元ト西国の人なり。

春日井郡大草村福巖寺に來り、江湖をも付し僧なりけるが、近きころ京師より飯綱仏を守り下し福巖寺にありしが、熱田円通寺の住侶となりて飯綱を円通寺に移し祈念もすると云程に、貴賤群衆して金銀米錢を持来て、此僧を頼む事幾千人といふをしらず。孤舟偏に此事のみ打けりて、我宗の禅法をみだり僧法にたけふ事のみ多かりけり。焼帛といふ物をして極の下に入至て間、狐あまた入り來りて怪事をなす。後はたま／＼に人の云ひければ其事あらはれて篠島ト云所へ流罪せられけり。宝国和尚の時よりありし円之ト云弟子を篠島へ流罪せしか。それも四月十一日なり。孤舟又もし十三年にあたる四月十一日、同じ月日、同じ配所に流たる、事いかなる故にやと人に云ひ給へり。<sup>編年大略ニ云。四月十五日。熱田円通寺孤舟和尚篠島へ流罪云云。</sup>

とあり、怪事をなすため篠島へ流罪されたとある。孤舟以後、独住ではなくなり輪住制となったのであろうか。ただし「編年大略」によれば、寛文元年（一六六一）四月十五日に流罪されたとあるため、流罪された孤舟と普濟寺に輪住した五世天海孤舟とに時代の隔たりがある。そのため同



一人物であるかは確証できない。

その後の誓海派よりの普濟寺輪住をみると、天正十一年（二五八三）に円通寺代住として常安寺七世恩海祥君が勤めている<sup>13</sup>。

天海孤舟の再住した天文十六年（二五四七）より恩海祥君が輪住した天正十一年の間は三十六年あり、その間に誓海派として三人は輪住を勤めねばならなかった。しかし、輪住していないのは円通寺が輪住となったため出ることができなかったのではなからうか。慶長三年（一五九八）には円通寺代住として輪住に出ているが、その人名は記されておらず明らかでない。同十二年（一六〇七）には円通寺代住として法持寺六世大洋宗吞が輪住しており、慶長十九年（一六一四）には

從元和元年 <sup>(マ)</sup>
誓海派 當山前住円通寺
勤之
皆元和元乙卯年

とあり、元和元年（一六一五）迄の一年間、円通寺住職が

尾張における草創期の寒巖派（川口）

輪住したことになる。しかし、その人名は明らかにならない。

同七年（一六二二）には法持寺七世嫩桂祖林、寛永七年（一六三〇）は法持寺八世月峰慶吞、同十七年（一六四〇）には福重寺九世滅禅恩鎖、慶安二年（一六四九）には常安寺八世五澗宗毅が輪住しており、江戸初期までは法持寺、福重寺、常安寺の歴住が普濟寺へ輪住した。ただし、福重寺九世滅禅恩鎖は「<sup>当末寺</sup>世代書上扣<sup>14</sup>」によれば、慶長十六年（一六一一）三月十七日に示寂しているため、寛永十七年（一六四〇）の輪住を勤めることはできない。したがって、承応三年（一六五四）に示寂した同寺十世密伝正啓が勤めたか、それとも滅禅恩鎖の示寂年月日の誤記かは明確でない。

「円通寺記」によれば明谷示寂後、輪住となり一六三年経た正保二年（一六四五）に大檀護の田島仲秀が官衛に訴え、無能秀榎を常在する住持（独住）に請じた。しかし、無能は承応三年（一六五四）四月二十七日に示寂している。「誓海和尚略譜」によれば、正保四年（一六四七）秋より独住三世になったことをいう。

尾張における草創期の寒巖派（川口）

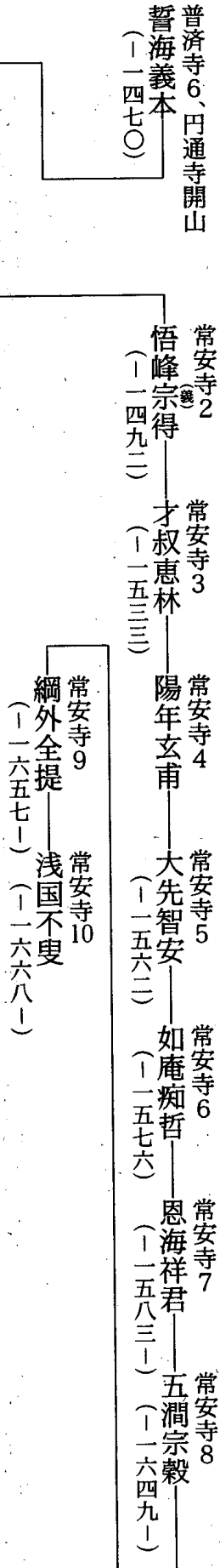
現在、円通寺の世代は開山誓海義本——二世明谷義光——三世無能秀榎——四世南齡牛誉——五世天海孤舟——六世玉葉耕雲——七世栄室存盛——八世碧峰儀春——九世興倫元苗——十世密山以伝となつている。しかし、開山の誓海、二世の明谷に続く草創期の三世は無能秀榎ではない。それは年代に隔たりがあり、実際の三世は不明である。四世南齡、五世天海は大永二年（一五二二）、天文五年（一五三六）、同十六年（一五四七）に普濟寺へ輪住しているところから、明谷の弟子である悟峰宗得、維玄義中、徳中義雲の弟子かとも思われるが詳しいことは明らかにならない。

六世玉葉は延宝元年（一六七三）に普濟寺へ輪住しており、元禄十年（一六九七）八月三十日に示寂した。そのた

め三世無能の示寂後に円通寺住持になつたものと考えられる。円通寺の世代は独住のみで考えられており、三世無能、四世南齡、五世天海、それに六世として玉葉が入つていたのである。法系譜を作成してみると、「系譜2」になる。

二世明谷の示寂後、四世天齡が住持に就いた間と五世天海が普濟寺へ再住した天文十六年（一五四七）以後の円通寺退董日より無能秀榎が独住となつた正保二年（一六四五）あるいは同四年（一六四七）までの間が輪住時代であつたといえる。なお、寛文元年（一六六一）には円通寺代住として白毫寺二世覚室禅海が普濟寺に輪住しており、貞享三年（一六八六）には医王寺の碧峰儀春が輪住した。碧峰は元禄十三年（一七〇〇）にも円通寺八世として普濟寺に再

〔系譜2〕



円通寺2、常安寺、  
法持寺、福重寺、長  
樂寺、秀泉寺、宗福  
寺各開山、黄龍寺勸  
請開山、龍泉寺開關  
明谷義光<sup>(本元)</sup>  
(一一四八二)

法持寺2  
維玄義中  
(一一四九七)  
法持寺3  
月洲瑞香  
(一一五四四)  
法持寺4  
仙英良菊  
(一一五五七)  
法持寺5  
春沢祖豊  
(一一五九〇)  
法持寺6  
大洋宗吞  
(一一六三三)  
法持寺7  
嫩桂祖林  
(一一六三二)  
法持寺8  
月峰慶吞  
(一一六五五)

法持寺9  
大通快道  
(一一六七七)  
法持寺10  
海岸義雲  
(一一六九二)

福重寺2  
徳中義雲  
(一一五一九)  
福重寺3  
柔室義順  
(一一五二二)  
福重寺4  
天魯道瓊  
(一一五四二)  
福重寺5  
玄白要三  
(一一五四六)  
福重寺6  
傘松本祝  
(一一五五二)  
福重寺7  
太翁義周  
(一一五七四)  
福重寺8  
天英智禪  
(一一五九三)

福重寺9  
滅禅恩鎖  
(一一六一二)  
福重寺10  
密伝正啓  
(一一六五四)  
福重寺11  
州峯果益  
(一一六七三)  
円通寺6  
玉葉耕雲  
(一一六九七)  
円通寺7  
栄室存盛  
(一一六八八)

円通寺4  
南齡牛誉  
(一一五三二)  
円通寺5  
天海孤舟  
(一一五三六―四七一)  
円通寺3  
無能秀榎  
(一一六五四)

長樂寺2  
義山華嚴  
(一一五二七)  
長樂寺3  
義伝月洲  
長樂寺4  
書嶽宗佐  
長樂寺5  
孝菴恵順  
長樂寺6  
梅雪義薫  
長樂寺7  
松沢曇林  
長樂寺8  
月峰桂吞

長樂寺9  
茂林永繁  
長樂寺10  
全応永久

宗福寺2  
独運閻瑞  
(一一四八四)

尾張における草創期の寒巖派(川口)

尾張における草創期の寒巖派（川口）

住しており、正徳三年（一七一三）には長楽寺二世石崖梁橋が輪住している。

円通寺は、宝永元年（一七〇四）六月十二日に九世興倫元苗の進院した時は仏殿と庫院のみであった。しかし、同五年（一七〇八）夏には大檀護田島仲頼より援助金を受けて仏殿、方丈、庫院、塔頭の陽谷軒、瑞用軒を復興した。<sup>15</sup>

復興後の享保十年（一七二五）には、十一世安山觀隆が普濟寺へ輪住しており、それ以後の元文二年（一七二七）には十三世光同峯日（峯日を玠林と改める。ただし、現在の円通寺世代簿には寒国宏道とある）、寛延二年（一七四九）には十四世華山昇龍（華山を活水と改める。）、宝暦十二年（一七六二）には十六世龍重旭泉、安永三年（一七七四）には同じく龍重が再住し、天明七年（一七八七）にも三住した。寛政十一年（一七九九）には十八世祖庭柏苗、文化九年（一八一三）には十九世金重透鱗、文政七年（一八二四）にも金重が再住している。天保八年（一八三七）には透禅伝宗、嘉永二年（一八四九）には二十二世勇進大猛（強）、文久二年（一八六二）には二十三世英州俊瑞が輪住しており、伽藍復興後の普濟寺輪住はすべて円通寺住持

が勤めているのである。

## 五 結 語

以上、尾張に進出してきた寒巖派の動向をながめてみた。円通寺は二世明谷が示寂した後、明谷の弟子による輪住制で運営された。これは本寺の普濟寺が開山華蔵義曇の示寂後、十三人の弟子が開いた十四カ寺の住職による輪住制によって運営されたのと同じパターンであった。永光寺、総持寺をはじめ初期の曹洞宗教団は輪住制により門派の結束を固めていったが、<sup>16</sup>東海地方の寒巖派も普濟寺を輪住にして門流を發展させた。さらに尾張へ進出した円通寺も輪住制をとり、明谷の開いた法持寺、福重寺、常安寺の三カ寺による交代の輪住制を敷いた。その三カ寺は約八十カ寺の末寺を数えるまでに門流を發展させた。

尾張の寒巖派の本山ともいえる円通寺の世代は独住によっているが、独住の存命期間の錯綜から独住世代に矛盾のあることも明らかになった。普濟寺への輪住は円通寺（十人）法持寺（三人）常安寺（二人）福重寺（一人）白毫寺（一人）長楽寺（一人）医王寺（一人）が勤めている。

円通寺の輪住時代は門末から普濟寺の輪住に出たが、円通寺の伽藍復興が成った後の享保十年以後はすべて円通寺歴住が勤めており、円通寺の運営が順調に整っていったものといえるのである。

注

- (1) 筆者は、かつて拙稿「寒巖義尹の研究——降誕の諸説をめぐって——」(昭和四十三年三月「仏教学会誌」第十号)、「寒巖義尹の研究——嗣承異説の一考察——」(昭和四十四年三月「仏教学会誌」第十一号)で考察したことがある。しかし、近年、仁和寺の僧侶が記した「仁和寺日次記」の記事から、義尹は順徳天皇と公雅法印の娘・宰相局のあいだに生まれた皇子説が有力となっている。
- (2) 『寒巖派の歴史と美術』(昭和六十一年十月 熊本県立美術館)五十三頁以後、鈴木泰山『曹洞宗の地域的展開』(平成五年八月 思文閣出版)三十九頁、一〇八頁参照。
- (3) 『誓海和尚略譜』は普濟寺に所蔵する「普濟寺開山伝及五代尊年譜」他の合綴した一冊に所収している。
- (4) 「常安寺世譜」は、明治二十二年三月に上田正国が撰述したものである。上田は他に「常安寺縁記」「溝口氏系図」も撰述し孔版印刷した。なお、円通寺二十八世陸鉞巖が大正五年に著わした『円通惨澹記』(円通寺蔵)の誓海義本、明谷義光の伝記は「常安寺世譜」によっている。
- (5) 普濟寺に所蔵する『當山前住牒』による。
- (6) 円通寺の由緒は『張州雜志』巻第五十六や『名古屋市史』社寺編(大正四年七月 名古屋市役所)六七三頁、『熱田風土記』巻八(昭和五十七年九月 久知会)所収の桑原一雄「日本最古の秋葉大権現出現の霊場」による。
- (7) 『知多郡史』下(大正十二年三月 愛知県知多郡役所)三四九頁—三五六頁にいう一説である。
- (8) 永享年間に領主溝口富之助が荒廢の寺跡を再興し、改宗して明谷を開山に迎え常安寺を開いたことは「常安寺縁記」「曹洞宗万松山常安寺境内之図」の略縁起にもいう。
- (9) 法持寺の再興年代の諸説は『名古屋市史』社寺編六六三頁による。
- (10) 頂相の自讃は『張州雜志』巻第五十六の法持寺、福重寺にあげられている。法持寺の什物として「開山明谷本光禪師画像自讃」とあり、福重寺の寺宝には「開山明谷和尚寿像一幅」とある。なお、『愛知県史料叢刊』名古屋市之一(昭和五十六年四月 愛知県史料叢刊行会)九十五、九十六頁にも翻刻されている。
- (11) 『大磯学区二十周年記念誌』六十一頁及び長楽寺発行の葉の「長楽寺一二〇〇年の歴史の流れ」による。
- (12) 誓海の刻した秋葉三尺坊の背面には「鎮防火燭 三尺坊義本刻」とあり、『寒巖派の歴史と美術』十七頁に写真が紹介されている。明谷の自刻もあることは田村貞雄監修『秋葉

尾張における草創期の寒巖派(川口)

尾張における草創期の寒巖派（川口）

信仰』（平成十年三月 雄山閣）三〇八頁の桑原一雄住職の

「名古屋熱田・秋葉山円通寺」に紹介されている。

(13) 普濟寺蔵の『當山前任牒』には

從天正十一年七月廿八日

誓海派 當山前任円通寺代住豊場勤之

同十二年甲申年

とある。豊場に所在する常安寺の天正十一年の住持が恩海祥君であることから明らかにした。

(14) 「當寺 井末寺 世代書上扣」は名古屋市鶴舞中央図書館蔵の『名古屋寺社記録集五』（市五一六〇）に所収している。

(15) 宝永六年（二七〇九）八月八日に興倫元苗が記した「円通寺記」による。

(16) 栗山泰音『嶽山史論』（明治四十四年八月 鴻盟社）一〇六頁以下、広瀬良弘「瑩山禪師に始まる曹洞宗輪住制について」（昭和四十九年三月 「宗学研究」第十六号）、『永平寺史』（昭和五十七年九月 大本山永平寺）四〇三頁以下参照。